

|          |   |
|----------|---|
| 氏名       | 西ノ宮 佳代                                  |
| 学位の種類    | 博士（美術）                                  |
| 学位記番号    | 博美第368号                                 |
| 学位授与年月日  | 平成24年3月26日                              |
| 学位論文等題目  | 〈論文〉蓬萊郷ーモザイクによるインスタレーションの試みー<br>〈作品〉蓬萊郷 |
| 論文等審査委員  |   |
| （主査）     | 東京芸術大学 教授（美術学部） 工藤晴也                    |
| （論文第1副査） | 〃 〃（〃） 田辺幹之助                            |
| （作品第1副査） | 〃 准教授（〃） O JUN                          |
| （副査）     | 〃 教授（〃） 薩摩雅登                            |
| （〃）      | 〃 講師（〃） 齋藤芽生                            |

（論文内容の要旨）

ー目次ー

序章

第1章 歴史に見るモザイク表現

1節 素材で描く

2節 歴史に見るモザイク表現

3節 日本の作例

第2章 制作の軌跡

1節 へいふち

2節 オブジェとしてのモザイク

3節 素材の問題ー憧れの世界とコレクション

4節 空間的アンサンブルとしてのモザイク

第3章 蓬萊郷

1節 作品概要

2節 大慶から蓬萊郷へ

3節 蓬萊郷の前提としての大慶

4節 蓬萊郷を構成するオブジェ

結び

参考文献

図版出典一覧

作品集

謝辞

「蓬萊郷」とは、大慶という大学院の修了制作時からこれまでテーマとしてきた作品に、私の恋愛体験に基づく物語が加わることにより生まれた内的世界の姿である。

私の思いや思い出など、個人的な物語を作品とするためには、それらを象徴化し普遍的なものへと昇華させなくてはならないだろう。私は象徴化した自分の物語を晴れの日と結びつけ、モザイクによるオブジェとして表現を行ってきた。単体のオブジェによる表現は既に大学院の修了制作時に大慶というテーマによって実践されている。大慶を発展させた形として、複数のオブジェを組み合わせることにより、私の内的世界である「蓬萊郷」を出現させることが、今回の博士展での試みである。

本論文はこれまでの自作の軌跡をたどるものである。以下に各章概説を述べる。

## 第1章 歴史に見るモザイク表現

本章では歴史的なモザイクの作品を自作と対比させつつ考察を行う。

古代のモザイク作品は建築物の一部として壁面や床面を装飾してきた。しかし、建築物という制約の中での制作では、素材本来の質は発揮することができないと考える。このことから、私は自分の作品を建築物から切り離し、オブジェとして制作している。

一方で、建物に施されたモザイクは、空間内に神話の世界や天上の楽園など、特定の世界を現実のものであるかのごとく出現させてきた。この特定の世界を出現させる試みは、歴史的なモザイクと自分自身の制作とが共通している点であると考え。聖堂建築は、建築物と一体化したモザイク表現の完成された形といえるだろう。

東京国立博物館の休憩室に施されたモザイクは、古代では見られなかった表現であり、テッセラとして用いる素材そのものに再び価値を見出した作品である。さらに、この作品で行われたイミテーションとして素材を扱う方法は、現在の私のモザイクと共通する表現であると感じている。

## 第2章 制作の軌跡

本章では自作の展開についての考察として、平面作品から立体作品への展開と、自身が作品制作の要素として空間意識を持つに至るまでの過程を辿る。

始めの頃に制作していたモザイクは、枠の中にイメージした情景をトリミングして表した平面作品であった。しかし、自分の内に思い描いているモチーフの姿を、よりダイレクトに表現するため、作品はレリーフ状のオブジェとなり、さらに立体作品へと展開していった。この変化の中では、素材もモチーフを描写するための手段から、モチーフを素材によって再現するイミテーションへと変化した。さらに、素材を原形のまま用いることで、独特の質や形状を生かした表現方法を追求するようになった。

作品に埋め込まれる素材は、モチーフの表現媒体であると同時に、私の長年のコレクションでもある。私は自分のコレクションを作品に埋め込むことで、そこに自分の物語を投影しているのだ。

私のモザイクは、足尾という特別な歴史的背景を持つ場での展示によって、特定の場所や空間と作品を結びつけるという表現手段を得た。この展示の経験以降、これまで行ってきた単体のオブジェの制作だけではなく、作品と空間とを結びつけることによって特定の世界を表現する方法を模索するようになっていった。

## 第3章 蓬萊郷

本章では今回の博士展の提出作品である「蓬萊郷」について解説を行う。私の内的世界である「蓬萊郷」は、これまで制作してきた「大慶」というテーマに、自分自身の恋愛体験が加わることで生み出された世界である。

この蓬萊郷の前提となる大慶とは、晴れの日对我的個人的な記憶を結びつけることによって象徴化したものである。大慶というテーマの作品では、正月の宴や親戚の結婚式の記憶やイメージを晴れの日と

結びつけ、それらを水引や縁起物などのモチーフとして象徴化することで単体のオブジェとして表現してきた。さらに、自身の恋愛体験を作品とするため、感情や思い出など個人的な物語を象徴化し、モザイクによって形を与えることで作品へと昇華させることを試みている。

厳島神社を訪れた体験により、複数のオブジェを組み合わせることで、ひとつの世界を表現するという方法を得た。こうして、これまでの制作と厳島神社での体験を踏まえ、複数のオブジェの組み合わせにより内的世界の表現を試みたのが、今回の博士展の提出作品の「蓬莱郷」である。この複数のオブジェの組み合わせによる表現とは、単体では表しきることができない複雑なものへと展開した、私の内的世界の姿の表れであるのだ。

## 結び

ここではこれまでの制作と今後の展望を述べた。作品とは自分の生活がそのまま現れたものといえるだろう。恋愛体験により、制作と生活は切り離すことができないものとなった。私は内的世界からの求めに応じ制作をすることによって、現在の自分の姿の再認識を行っているのだ。今後も自身の物語が紡がれることより、新たな情景が創造されていくことだろう。作品によって自身の未知の部分を紐解くことは制作の醍醐味であると考えている。今後の作品の展開に自分自身大いに期待している。

### (博士論文審査結果の要旨)

本論文は、博士の学位申請のために制作された作品《蓬莱郷》について論述されたものである。《蓬莱郷》は、作者個人の内的世界を、モザイク・オブジェを配したインスタレーションを通じ、体験可能な空間的環境として提示しようとする作品である。これに対して申請者は、まずモザイクという媒体に対する独自の見解を明らかにし、さらに学部の頃から一貫して取り組んでいたモザイク制作の、経験と内省の蓄積から本作品を発想するに至ったプロセスを解説した後、それらがどのように《蓬莱郷》に結実したかを論じている。

本論文は、3つの章から構成されている。第1章の1節と2節では、古代地中海世界に発生し、初期キリスト教時代にその頂点に達したモザイク芸術について、作家としての独自の視点から、表現上の特質を整理している。1節では、まずモザイクが建築体の堅牢な装飾技法だとする。そしてモザイクの多様な歴史的技法に対して申請者が着目するのは、モザイク片自体の個性を生かした造形の方角と、モザイク片の個性をイリュージョニスティックな描写のために犠牲にする造形の方角の、ふたつの流れが認められる点である。申請者は後者の方向について、モザイク本来の特性を反するものとして否定的な見解を示している。2節では、建築装飾としてのモザイクが、やはり古代の作品を例に取り上げて概観される。この観点から見たモザイク芸術の最大の特色は、神話や宗教の観念世界を、建築によって囲われた現実空間に体験可能な形で実現する点にあり、その頂点となるのが初期キリスト教から初期ビザンチン時代の聖堂モザイクである。さらに3節では目を近代に向け、日本のモザイクが取り上げられる。とりわけ着目されるのは、東京国立博物館休憩室の壁面装飾である。申請者は古代とは異なるこのモザイクの特質を、モザイク片が絵画的イリュージョンを生み出す手段としてではなく、いわばモチーフの質感を模倣するイミテーションの手段として用いられている点だと指摘する。

第1章で上記のように過去のモザイクを概観したのに続き、第2章では、申請者のモザイクに対する興味の所在を確認した後、その興味に即して、学部からの修士課程に至るまでの作歴がどのように展開されたかを記述する。まず1節では、幼小期に遡るモザイクの原体験が「へいぷち」というキーワードで記される。「へいぷち」は茶碗や植木鉢の破片を壁面にはめ込んで文様を描く単純な装飾のことだが、申請者は、独自の個性を主張する破片によって全体の文様形態が形成される、すなわち部分と全体の相関によって成立する、この単純な装飾の複合的な造形性に強い関心を寄せている。さらに2節では、自

らのモザイク制作が対象を、平面的な枠の中でイリュージョニスティックに描写するのではなく、立体的に造形する方向に向かったことが記される。まず対象となったのは蛸だが、申請者は古代の床モザイクに由来するこのモチーフを描写するのではなく、自身の触知的な体験をも踏まえた蛸の内的なイメージを直接客体化するため、絵画的な枠を超え、基体を壁ではなくレリーフ的立体として形成した上にモザイクを施すことを試みる。このレリーフ的モザイクは、さらに女性や猫をモチーフとして展開されるうちに、完全な立体モザイク、すなわちモザイク・オブジェへと発展する。そしてこの過程でまた、立体の表面に施されるモザイクを描写的ではなく、模倣的に用いる表現が展開されるのである。例えばモザイク片として用いられた滑らかなガラス質の素材や貝殻は、申請者のイメージに刻まれた軟体動物のぬめりや吸盤の感触を直接立体に付与する手段となる。こうしてモザイク片はオブジェとしてのモチーフの質感を模倣する手段となり、同時に模倣表現に対してモザイク片自体の形態や質感を利用することで、「へいぶち」にみられたような、形態全体とモザイク片の個性が複合的に関連づけられる造形の可能性が示唆される。

上記のような複合的な作品構造を踏まえ、3節ではさらに、モザイク片に申請者の経験と記憶に結びついた装飾品などのアイテムを用いることで、個人の「内的な物語」を現実世界に投影するモザイク表現が提示される。作例としてあげられているのは《猫之姫一年々大吉》(2010)である。そこで申請者は、折々に収集した思い出のあるコレクションの、銀のパーツや真珠球をモザイク片として用いている。こうしてモザイク・オブジェは、モザイク片のレヴェルで申請者の個人的な記憶と直接結びつき、一般的な象徴として提示されるだけでなく、作者の「内的な物語」の象徴として独自の意味とリアリティを獲得する。これに対して4節では、環境のトポスに形態を与える手段としてのモザイク・オブジェの試みについて記されている。《マダムS—沢入婦人像》(2007)は、溪谷鉄道沢入駅の古い木造の待合室に、古風なドレスを纏った等身大婦人像を配したものである。このオブジェは、かつて栄えた足尾銅山を含む溪谷鉄道沿線地域の歴史的イメージの投影であり、その土地の記憶の象徴でもあるのだが、同時に、地元で採れる沢入石をモザイク片に用いることで、オブジェの象徴性のリアリティをモザイク片が保障する作品となっている。

以上のようなモザイクの制作経験を踏まえて申請者は博士の学位請求作品に挑むのだが、その構成と意図については第3章に記されている。まず1節では、作品の概要が記されている。《蓬萊郷》は、「蛸の器」と食虫植物のオブジェ6点からなるグループ「蝶恋花」を核として、3点の鏡をもちいたオブジェ「蓬が嶋」グループ、さらにそれを取り巻くオブジェ4点、壁面に取り付けられたレリーフ3点によって構成されるインスタレーションである。主題となるのは申請者の個人的な恋愛経験のイメージあるいは物語だが、このテーマは修士の段階から、申請者が一貫して追求してきたものとされる。《蓬萊郷》に先行し、その前提となる一連の作品は「大慶」というキーワードでまとめられている。次に2節では、この「大慶」作品について記述される。「大慶」とは正月や結婚式、さまざまな節句などの行事、すなわち晴れやかで一回的な時間の記憶と恋愛感情が結びついた申請者の内的世界を意味する。この世界は、着飾った女性《大慶—K嬢—》(2008—2009)をはじめとするモザイク・オブジェのディスプレイとして提示される。修士課程修了作品として展示されたこれらのオブジェは、それ自体が申請者の晴れやかな記憶の象徴であり、その中心となる女性像は自己イメージの投影でもある。同時にモザイク片には海星や珊瑚といった、申請者のあこがれる物語を暗示する事物、金の鈴や装飾品が用いられている。こうしたモザイク片は、申請者の個人的なコレクションに由来し、やはりオブジェの象徴性により明確なリアリティを保障しているのだが、さらにここでは、オブジェの立体的形態を、基体ではなく大きなモザイク片そのものによって作る新たな技法が開発されることによって、モザイク・オブジェの複合性はさらに意識的に強調されている。

この「大慶」作品群は個々のオブジェのディスプレイであったが、3節ではさらに、オブジェ相互の関係を通して内的世界を出現せしめる作品の方向が提示されている。きっかけとなったのは、巖島神社

訪問であったとされる。そこで申請者は、社殿、鳥居、風景が総合的に形成する環境を、「異界」としての吉祥に満ちた理想世界、すなわち「蓬萊郷」として体験する。この体験は、オブジェを組み合わせた空間的環境を創出するインスタレーションによって、内的世界を総合的に出現させる作品へと申請者を導くことになる。こうしてモザイク・オブジェは《蓬萊郷》に至って、内的世界を空間的に経験するための環境を創出する手段になるのだが、4節ではその構造が具体的に論じられる。すなわち作品の中心となる「蝶恋花」グループには、生命力にあふれた蛸や食虫植物のモチーフを通じて自己イメージが投影されている。そしてそれを取り囲む「蓬が嶋」グループ他のオブジェ群は、それぞれ吉祥の象徴的モチーフを提示しつつ、自己イメージの結界ともなっている。モザイク片には申請者が収集したガラス球や貝殻などがふんだんに用いられ、個人的な記憶に結びついた晴れやかな素材によって自己イメージを飾っている。これらのディスプレイを巡りながら見てゆく者は、まず空間体験として申請者の内的世界を訪問することになる。そして個々のオブジェを観ることでその象徴性を確かめ、さらに仔細にモザイクを観察するとき、そこに実現された世界の具体的な質を感じ取ることになるのである。結語として申請者は、この重層的な作品を、オブジェ単体のディスプレイでは不可能だった、より複雑な内的世界の、総合的な開示を可能にするものとして位置づけている。

本論文は、申請者の博士学位申請作品が、モザイク技法に対する十分な考察を前提に、長期にわたるモザイク制作の一貫した発展の帰結であることを説得力をもって明らかにしている。モザイクは平面から立体オブジェとなり、さらにインスタレーションに用いられるプロセスで表現内容の振幅を増大させてゆく。そして申請者のたどり着いたモザイク表現は、部分と全体が相補的に作用する複合的な構造を前提として、内的世界にリアルな形態を付与する、まったく新たなものであったことが理解されよう。さらに本論文は、今後の申請者の経験と作品制作の中で、その造形が柔軟に展開され発展するのを予感させるものである。以上の観点から本論文は、博士論文にふさわしい論考としての内容を十分に満たすものとして認められる。

#### (作品審査結果の要旨)

西ノ宮佳代の博士課程後期修了作品「蓬萊郷」についての作品審査結果の要旨を申し述べます。

この作品は、壁画の技法であるモザイク技法を使った立体作品を複数制作し、それらを空間に配置し展示したものである。作者は当大学学部生の頃よりモザイク技法を学び始めその後大学院では工藤晴也教授の指導のもと、その技法のみならず広く壁画の歴史を学び、同時に大学外部で展覧会などを含む実践的研究の研鑽を重ねてきており、「蓬萊郷」はそのような意味で作者の長年に渡る制作研究の成果ともいえる作品である。作品全体とそれを構成する個々の作品は、作者が自身の個人的体験に材を取りながら、そのなかから湧き出る喜びの感情や郷愁など人間の本然的情緒を視覚化し空間に持ち上げることで、仮想的場（ユートピア）を展開せしめることを目的として制作された。作者はこの制作に、これまで研究してきたモザイクの技術や壁画の歴史的意義をよく理解し自身の作品に反映させている。特筆すべき点は、この作品においてモザイクを従来の室内外の空間や建築様式に組み込まれる恒久的な表現から自立させ、インスタレーションとして可変性、移動性を要素として与えたことである。モザイクという伝統的な技法を使いながら、自身の体験と身の既製既知な事物からさらにイメージを広げ、新たな表現の創出に到達したことを高く評価する。しかしながら、工藤先生を始め田辺先生方からは、この新しい表現と形式には尚、技術的に未熟なる部分や強度など構造において改良すべき点があるといわれ指摘された。また大学美術館の薩摩教授からは、将来的には“実作者側からの壁画の研究書”を一冊著す志をもって今後の制作に励むようにとの励ましをいただいたことを付しておく。また、私たちの未視のイメージ、蓬萊郷＝ユートピアという仮想空間と、事物を参入させることで“場を場、足らしめる”あるいは異化させるインスタレーションによる実際空間の二つの空間をどのように繋げていく

のかは今後に懸かる大きな課題であろう。しかし、そのような問題や課題を抱えながらもこの作品は、私たちに迫ってくる迫力と元気と賑わいに溢れている。この魅力は現在のアートに最も必要とされる力である。作者は、この力を十分に資質として備え、同時にたゆまぬ努力と研鑽を以て将来を期待させる。

以上のことから、西ノ宮佳代の作品を博士号学位取得に相応しいものと判断する。

#### (総合審査結果の要旨)

西ノ宮 佳代の課程博士學位総合審査結果要旨を報告する。

作品題目及び論文題目は、共に「蓬萊郷」である。「蓬萊郷」とは、作者自身の造語であり、恋愛観を主とする内的世界を理想化し、普遍のものへと昇華させる場（空間）を作品（インスタレーション）によって具現化させたものある。

西ノ宮は、学部よりモザイク技法に興味を持ち、ギリシャ・ローマモザイクの表現技法に学びオーソドックスな作品を制作したが、次第に図像の一部が枠からはみ出し、半立体へ移行し、更に卒業制作では立体作品を制作するに至った。修士課程では主にモザイクによる立体作品を研究したが、大理石に変えて既成タイルや自身のコレクション（ガラス玉や貝殻等）を表現素材として用いる過程で、伝統的なスタイルから抜け出し、独自の解釈による表現がみられるようになった。素材本来の形態を維持しながらモザイクを成すスタイルは、この頃芽生えてきたものである。特定の意味を持たせた立体物に更なる意味を付加させるスタイルは、表現の二重構造ともいえるもので観者に強い印象を与える。この研究は博士後期課程において更に幅を広げ複雑化し、過剰ともいえる多用な素材が細胞核のように立体表面に貼付けられていった。作者にとって重要な意味を持つこれらの素材は、強固に、また濃密に作者の思いを伝達する道具となり、「蓬萊郷」は長いスパンをかけて形成されてきたのである。モザイクは本来、意味を持たないひとかけらが集合体となることで意味を成すものであるが、ひとかけらを物語の意味付けの道具とする西ノ宮の試みは、新たなモザイク表現のスタイルを確立したものといえよう。しかしながら、立体作品の構造について、支持体の材質及び強度面からいくつかの問題点があり、これらは、今後の研究に期待したい。

学位論文は3章から成り、第1章はモザイクの歴史的内容について、第2章は主に幼児体験を出発点とする制作の根源的動機について、第3章は学位対象作品について述べられる。第1章は、モザイクの歴史について学術的、且つ体系的によくまとめられており、古代より建築物との関係において成り立つモザイクの発祥から初期キリスト教時代までを述べ、更に東京国立博物館本館と表慶館、旧朝香宮邸の装飾を例に上げ、日本の近代建築におけるモザイクにも分析を加える論を展開する。第2章は、自分史ともいべき内容であり、創作の原点を幼児体験の記憶やテレビアニメを架空現実化させる嗜癖にあると説き、蓬萊郷の原型ともいえる創作の骨格が述べられる。第3章は、作品「蓬萊郷」の概説であり、自身の恋愛観等、内面的問題を創作の中心としながら、作品の支柱として歴史的建造物の空間と機能、日本人の慣習、風土、更には現代の若者達の恋愛表現にまで調査を行い、それらを実証的に証明しながら自身の表現形態に咀嚼し直す方法論が展開される。

作品、学位論文共に博士後期課程における研究成果が認められ、作品は、強い表現力とモザイクに独自の表現スタイルを確立した点、論文はモザイクを歴史的観点から詳細に研究し、創作研究について論を展開する中に知と技の一致がみられる点、以上を特筆すべき成果として評価し、学位審査にあたった審査員全員が一致して学位授与に相応しい研究内容であることを認め、学位を授与するものとする。